



名寄市立大学の窓から知への誘い

「親子ってなに？」

保健福祉学部社会福祉学科 教授 小野寺 理佳

vol.9

家族は多様なものになり、血縁第一ではなく情愛で結ばれた親しい関係性として考えられるようになりつつあります。その一方で「血縁の子どもを手に入れる」「自分で子どもを産む」ための生殖補助医療の技術の著しい発達がみられます。生殖補助医療とは、生殖を補助することを目的としておこなわれる医療のことをいい、人工授精、体外受精などが含まれます。つい先だって、不妊の夫婦に卵子を提供する国内初の卵子バンクがスタートするとの報道がありました。民間団体による提供の呼びかけに100人以上の応募があったとのことです。

生殖補助医療をめぐることは、卵子や精子提供のルールなどの法整備、技術としての安全性、提供者の情報保存や支援、生まれた子どもが出自に悩んだ場合の支援などの課題が多く残されています。提供には副作用やリスクが伴い、提供者とその家族はそれを引き受けざるを得ない状況におかれます。生まれた子どもの「出自を知る権利」を保障しようとするれば、子どもと提供者両方の家族関係に影響しかねません。こうした状況にもかわらず、生殖補助医療の現場はどんどん先に進んでいます。では、私たちは、親子関係における血縁を「重視しないのか」それとも「重視したいのか」どちらなのでしようか。家族社会学の後半の回ではこうした問題を考えます。

学生にとっては、結婚も親になることもまだ先の話です。とはいっても、彼らのほとんどは、将来自分が家庭をもち、子どもをもつことを漠然と想定しています。このとき、自分が生殖補助医療の対象者となるかもしれないとはあまり考えていないでしょう。ですから、生殖補助医療について問うと、最初はまさに他人事として「そうしたければそうすればよい」そこまでがんばる気持ちから「いい」と答えます。けれども、血のつながった子どもを望む人々の思いと生殖補助医療への取り組みの実態を知るうちに、彼らは「血縁」というものについてあらためて深く思いを致すようになります。そして、自分自身も、親子の血縁があることを「自分がこの世に存在すること」の証として大切に考えていることに気づいていきます。自分と親との関係を思い起こし、親への特別な思いを自覚したという学生も少なくありません。血縁があるかどうかということ、当たり前過ぎて考えられることもないけれど、自分が思う以上に自分を支配

しているということでしょう。

生殖補助医療について考えることは、親子とはなにかという問題をあらためて考えることです。私たちは血縁よりも心の結び付きを重視するいいながら、血縁の有無にもこだわってしまっているといえます。私たちの心の中にはこうした矛盾がたくさんあります。現実の多様な家族関係に相対したとき、立場が異なれば問題の見え方も大きく異なることを理解し、多様な関係性のなかで生きている生きていかざるをえない人々に共感していくことが求められます。そのためには自分自身もまた家族について矛盾した思いを抱えた人間であることを知ること、これが何より大切なのではないでしょう。



みなさん、こんにちは。地域交流センターです。

地域交流センターでは、地域から寄せられたボランティア情報を学生に提供・調整を行っています。昨年は依頼があった50件余りのボランティアに対し、35件・延べ281人の学生が参加しました。市外からの依頼もあり、各団体に喜んでいただいています。

「大学生なんて暇でしょう」と思っている方も多くいるようですが、本学の学生はみなさんが思っているほど暇ではありません。学年が上がるほど実習、授業のレポート、卒業研究、国家試験対策など寝る間も惜しんで勉強しています。週末も集中講義があったり、サークル活動やアルバイトをしている学生も多いため、参加が難しいこともあります。参加者の多

くは1・2年生ですが、3・4年生も時間を見つけて協力をしてくれています。

地域交流センターの活動から離れて、サークルや個人単位でもボランティアに関わっている学生もいます。市民の方から見えないところで、学生は地域のみなさんと協力しながら頑張っています。まだ、未熟な学生ですが、ご指導をいただきながら温かい目で見守っていただけると嬉しいです。

問い合わせ 地域交流センター(市立大学恵陵館1階)
 ☎01654②4194(内線2101 道北地域研究所内)